

# 中川李枝子『山のぼり』論

## —幼年童話としての構造と子どもの読者の受容—

A Study on the Fairy Tale “Yamanobori” by Rieko Nakagawa

—the Structure and the Acceptance of Children—

山田 吉郎

Yoshiro YAMADA

### 序

中川李枝子の童話集『いやいやえん』（昭和37年12月、福音館書店）は幼年童話の名作の一つとして位置づけられている。この童話集には巻末に置かれた表題作『いやいやえん』をはじめ『ちゅーりっぷほいくえん』『くじらとり』『ちこちゃん』『やまのこちゃん』『おおかみ』『山のぼり』など七篇の短篇童話が収録されている。ちゅーりっぷほいくえんを舞台に、年長のほしぐみと年少のばらぐみの子どもたちの日常を描いた童話集である。従来表題作の『いやいやえん』が反抗期を迎えた幼児（しげる）の姿を生き生きと描き、保育園で過ごす幼児の一つの典型を造型した作として数多く論じられているが、本稿では、そうしたしげるの、反抗的な面はあるがアクティブでのびやかな心の動きが描かれた『山のぼり』に焦点を据え、その幼年童話としての特質を考察することにした。

私見によれば、『山のぼり』は保育園生活の子どもたちの姿を枠組みとしながらも、子どもたちが保育者の見守る場を離れ、自主的に山のぼりをしてゆくというある種の冒険譚であり、その中で人一倍わがままなしげるの行動が決して否定的ではなく、男児ののびやかな心の成長を実感させる姿として外側から見守るように描かれている。『いやいやえん』ではしげるのわがままな姿は容認されながらも抑えられている印象があったが、『山のぼり』ではしげるのわがままが自らにはね返ってはくるものの、そこにさして否定的ニュアンスはなく、むしろ外側からおおらかに見守られるような形で描かれている。

このように、『山のぼり』に見られる独自のモチーフと構成、表現を分析し、それをふまえて本作品を読者（子ども）がどのように受容するのかという問題を明らかにするのが本稿の目的である。

### 1、『山のぼり』の作品世界—前半世界—

『山のぼり』は、冒頭部が伝説めいた語り出しで、受容する子どもたちの心を一気に物語の世界に引き込む効果をあげている。まず、この冒頭部の考察を試みる。なお、テキストは、初版『いやいやえん』（昭和37年12月発行、福音館書店）に拠る。本文は総ルビであるが、引用にあたっては必要なもののみにルビをふることとする。

山が五つあります。

どの山も、てっぺんがまるくて、みんなちがういろをしています。

一ばん目は、赤い山です。赤い山には、りんごの木がたくさんあります。

二ばん目は、きいろい山です。きいろい山には、ばななの木がたくさんあります。

三ばん目は、だいだいいろの山です。だいだいいろの山には、みかんの木がたくさんあります。

四ばん目は、くろい山です。くろい山には、おひさまがさしません。えだやはのおいしげった、ふとくてたかい木がたくさんあって、いつもよるのようです。

五ばん目は、ももいろの山です。ももいろの山には、ももの木がたくさんあります。

この冒頭部には、子どもたちの心に届き、心をはずませ、物語への期待感をわきたたせるいくつかの要素が見てとれる。すなわち、「一ばん目の山」から「五ばん目の山」までそれぞれ同様の内容（エピソード）が並ぶという同質のエピソードの反復（正確には「四ばん目」は異質である）、数あそび的要素、それぞれの山に子どもたちの好む果物が生っているという食べ物のモチーフ（これも「四ばん目の山」は異質）、そして、「四ばん目の山」だけ不気味な雰囲気をもっているという子どもたちの想像力を刺激する設定などがあげられる。また、この冒頭部は独立した章のようになっていて、この中に子どもたちの姿は描かれず、山

の形態がプロローグのように語られるだけである。それだけに伝説めいた雰囲気揺曳し、子どもたちには昔話を聴くような期待感が醸成されていると考えられる。

こうしたプロローグを前置きにして、おもむろに子どもたちが出てくる保育園の生活が動き出してゆくのである。それは、「とてもいいおてんきです。」というふうに、保育園のある一日のできごとという形で語り出される。その物語の発端は、次のような子どもたちの遊びの提案を契機としている。

とてもいいおてんきです。

「きょうは、おもちゃであそばないで、山のぼりをしようよ。」

と、ほしぐみがいきました。

「あたしもいく！」

「ぼくもいく！」

と、ばらぐみも山のぼりがしたくなりました。

「じゃあ、みんなでせんせいにききにいこう。」

みんなは、せんせいのところへいきました。

ふだんはおもちゃで遊ぶのだが、今日は特別に山のぼりをしようというほしぐみの子どもたちの提案にばらぐみの子どもたちも加わり、話がまとまる。そして、保育園生活のあり方として、先生のところへ許可を求めにゆくのである。

さて、こうした子どもたちの申し出に対して、先生が提示したのが「やくそく」である。保育園の日常の中でも、ここから先は行かない約束、食事の前は手を洗う約束などという形でさまざまに保育者と園児との間で「やくそく」がなされており、子どもたちの行動にはそれなりのリアリティーがある。また、その子どもたちに「やくそく」を提示する先生の側の言葉もきわめて日常的な内容と雰囲気をもつものである。ここで先生が提示するのは、具体的には食べることと、行ってはいけない場所についての約束である。先生は子どもたちに次のように言う。

「山へいけば、いろいろなものをたべましょう。たべるときは、なんでも一つだけ、というやくそく。」

りんごも、一つ、

バナナも、一つ、

みかんも、一つ、

ももも、一つだけ。」

「わかった、二つもたべると、おなかをこわすからね。」

「そうですよ。じゃあ、わかった人は、手をあげてください。」

「はい。」

この問答は、保育園での日常感に充たされている。食育の面からのアドバイスでもあり、子どもたちにとっては保育園でも家庭でも日常的に告げられる言葉かけである。そして、物語ではこの「やくそく」に加えてもう一つの「やくそく」が先生から提示される。

「それからもう一つ、いちばんだいじなこと。」

と、せんせいは、ひとりひとりのかおをみていきな

がら、ゆっくりといいました。

「それは、くろい山のことです。」

あの山の木は、みんな、えだやねがくねくねとおぼけのようにのびてからみあっているの、だれものぼることができないのです。

もし、そんなところへいったら、まいごになってかえれなくなりますからね。

くろい山には、ぜったいにのぼってはいけませんよ。」

「おお、こわい！」

みんなはかたをちぢめてふるえましたが、すぐに、

「はい、わかりました。」

と、げんきよく手をあげました。しげるもよくわかったしるしに、りょう手をあげました。

このような危険な所へ行ってはいけないという言葉かけも、とくに保育園生活の中では日常的になされていることがらであろう。子どもたちの反応はいささか行儀すぎるようにも感じられるが、わざと両手をあげるしげるの反応には少々反抗したい時期の男児の姿が鮮やかに描かれている。しげるは、若林千鶴が述べるように、「先生や母親など大人の言うことを素直に聞くよい子ではなく、子どもの論理で行動するやんちゃ坊主」であるが、併せて「杵からはみでたいという子どもの気持ちと、遊びのおもしろさのみごとに代弁している」子どもなのである。(定松正編『世界・日本児童文学登場人物辞典』平成10年4月、玉川大学出版部、「しげる」の項)<sup>1)</sup>

なお、この「くろい山」の設定は、この物語を読む子どもたちの心をつよく惹きつけるであろう。子どものもつ想像力と冒険心を刺激し、「えだやねがくねくねとおぼけのようにのびてからみあっている」「まいごになってかえれなく」なる山だと告げられ、「おお、こわい！」と思いながらも、つよく興味を寄せずにはいられない者も出てくると思われる。その代表的な登場人物としてしげるが設定されており、しげると比較する形で他の子どもたちの素直さ、行儀のよさが若干素直すぎる形で描かれている。これはむしろ、物語構想上の強調と配置の工夫によるものであろう。

さて、「では、やくそくのまもれる人は、いってらっしゃい。」と先生に言われた子どもたちは、いよいよ山のぼりへと出発する。

ここからは、それぞれの山に登るエピソードが連鎖的に語られてゆく構成となっており、いわゆる同質のエピソードの反復が物語を読む子どもたちの関心を高めてゆく。まず三つの山(赤い山、きいろい山、だいいい山の山)に登ってゆくが、そのエピソードはほとんど三つとも同質のものである。本稿では、最初の赤い山に登るエピソードを詳しく見てゆくことにする。

なお、赤い山に登るにあたって、最初にどの山に登るかで、ほしぐみとばらぐみの子どもたちの間でやりとりがあるが、この場面が子どもたちの意見の表明、話し合い、状況に応じた対応という興味深い流れを構成していて、注目される。意見の対立から収束に向かうプロセスはやや物分

かりがよすぎる感もあるものの、子どもたちそれぞれの気持ちがよく出ていて、読者に自然に受けとられるであろう。

さて、赤い山に登る場面を見てゆこう。

みんなは、うたをうたいながら山をのぼりました。  
 おやまだ おやまだ だんだんだん  
 たかいぞ たかいぞ だんだんだん  
 もうすぐ てっぺん だんだんだん

山の上には、りんごの木が二十一れつならんでいて、どのえだも赤いりんごでいっぱいです。

「あ、ぼくきめたつと……あの大きいりんごは、ぼくのだよー」

しげるは、みんなをおいこして行って、いちばんさきに、目についた大きいのをいそいでとりました。

ほかの子どもたちは、りんごの木の下をいったりきたりして、いちばん大きくておいしそうなのをさがしています。しげるはそのあいだに、じぶんのりんごをたべてしまいました。

「だんだんだん」という力強い音律を伴った歌をうたいながら、赤い山へ登ってゆく子どもたちの様子が活写されてゆく。そして、山の上には赤い実をつけたりんごの木がびっしりと並んでいるのであるが、ここで童話集『いやいやえん』全体の主人公であるしげるの行動が語られる。しげるは他の子どもたちのように協調的ではなく、一人で子どもたちの列を追い越すと、いきなり大きなりんごの実をもぎとり、むしゃむしゃと食べてしまうのである。いわばきわめて自分勝手な行動で非難の対象になるはずであるが、周りの子どもたちはいつものことと思っているのか、とくに口に出して批判はしない。が、それにつづくしげるの行動は、先ほどの保育園の先生との「やくそく」を破るものであった。自分の分のりんごを食べてしまったしげるは、早くバナナの生っているきいろい山へ行きたいのだが、他の子どもたちはまだ自分たちそれぞれ一個ずつのりんごを食べていて、動き出そうとしない。その時のしげるの行動が次のように描かれている。

「おそいなあ、はやくたべちゃえよ。」

みんなはおいしそうにたべています。しげるは、つまらなくなりました。

しげるは、すみっこのだれもない木のところへはしって行って、もう一つりんごをとりました。

みんなは、りんごを一つたべました。

しげるは、二つたべました。

これは、明らかにしげるの「やくそく」破りである。しげるはそれを、「すみっこのだれもない木のところ」で行うのである。ここには皆には知られたくないという心理がのぞいており、保育園のクラスという集団の中での自分を意識している。

以上のような、赤い山でのエピソードの流れは、先述のようにこの後二回くり返される。すなわち、きいろい山、だいだいいろの山でも、出てくる果物はバナナ、みかんというふうに異なっているが、プロットの展開はほぼ同じ

である。なお、赤い山では「りんごの木が二十一れつ」あったのに対し、きいろい山では「ばなの木が三十一れつ」、だいだいいろの山では「みかんの木が四十一れつ」とあると語られて、子どもにとっての数あそび的要素を刺激しているのが注目される。なぜ山にのぼるたびに数字が増えてゆくのか、それも十ずつ増えてゆくのか、またなぜ「～一れつ」というふうに中途半端な数なのか、物語を受容しながら問いかける子どもも出てくることを想定したプロットの運びであると思われる。

このようにして、保育園の子どもたちは、赤い山ではりんごを、きいろい山ではバナナを、だいだいいろの山ではみかんを、それぞれ一個ずつ採って食べたのだが、先述のようにしげるだけが「やくそく」を破ってこっそり二個ずつ食べている。そうしたエピソードが都合三回くり返し語られたのち、物語は大きな変化、すなわち起承転結の「転」を迎える。しげるがくろい山へと分け入ってゆく物語がはじまるのである。ふり返ってみれば、この物語の冒頭から読者の子どもたちは「くろい山」への興味を持たされていて、三つの山のぼりを読者として体験し、いよいよ最も謎に充ちた山へと導かれてゆくわけである。その読者を引き込む構成は巧みである。次章では、くろい山でのしげるの体験の意味するところを中心に考察する。

## 2、『山のぼり』の作品世界－後半世界－

保育園の先生から四番目の「くろい山」へは「ぜったいにのぼってはいけませんよ。」と言われていた子どもたちは、「さあ、しゅっぱつ！／こんどは、くろい山のまえをとるんだから、のろのろしてちゃだめだよ、はしるんだ。」と言い合って、走り出す。それに対して、赤い山・きいろい山・だいだいいろの山でそれぞれ二個ずつの果物を食べてしまったしげるは、すでに満腹で走れなくなっている。それどころか、「あるくのさえ、いやに」なっているのである。つまり、山へ登るに際しての保育園の先生の言葉（それぞれの山の果物は一人一個ずつ食べるという約束）は、食事の分量を考えてのものだったのであるが、その約束を破ったしげるは、すでに食べ過ぎの状態だったわけである。単純に考えてすでに六個の果物を胃袋に入れたしげるは、子どもたちに許容されている三個をはるかに越えてしまっているわけである。そのような果物の数の計算もさりげない形でこの場面には組み込まれている。ともかくも、しげるは「ぼく、ももなんかいらないや。みんながかえってくるまで、ここでまっているよ。」と言って石の上に腰かけてしまうのである。

さて、しげるだけが今、「くろい山」の前にいる。「しげるはたったひとりになりました。／しげるのまえには、くろい山があります。」と記され、ひとりぼっちのしげるの心細さが表現されている。

ここからは、しげるの単独行の物語であり、読者の子どもたちの視点はしげる一人と重なり、好奇心と不安の入り混じった冒険へと乗り出してゆくことになる。ここで主人



公の置かれた「ひとりぼっち」という状況は、幼年向けの童話や絵本においてはある意味で最も厳しいものである。幼年向けの冒険譚的構想の物語を見ても、同伴者を伴ったものと単独行のものがあるが、『ももたろう』や『プレーメンの音楽隊』『雪渡り』（宮沢賢治作）など複数で行動する物語に比べ、『一寸法師』『はじめてのおつかい』（林明子絵・筒井頼子文）『手袋を買いに』（新美南吉作）など単独行の物語の方がより不安感や孤独は増幅されている。読者の子どもたちにとっても、この「ひとりぼっち」という要素が付加されることにより、より切実な臨場感を感じとっていると思われる。『山のぼり』におけるしげるの「くろい山」への冒険もその意味ではこの物語の中で最も緊迫感を伴ったものであり、物語の中核部をなしていると言ってよい。そして注目すべきは、『一寸法師』や『はじめてのおつかい』など単独行の物語の多くが主人公の相応の成長なり進展なりを示しており、本稿で取り上げた『山のぼり』のしげるの場合はどうであるかを検討することが重要な課題の一つであると言えるであろう。

さて、「くろい山」へ登るしげるの冒険に着目しよう。しげるの前には「大きい木がかさなりあっていて、いつも、よるのようくらい、しずかな山」があり、しげるは「こわく」なってしまった。そのため、他の子どもたちが行ってしまった「ももいろの山」に向かって、しげるは「やっほー」と呼びかけてみたのである。ところが、このしげるの呼び声に対して、「くろい山」の奥から「やっほー」と答える声を耳にすると、しげるの恐怖心は薄らぎ、かわってしげるの好奇心と冒険心がにわかに生き生きと動き出す。幼い子どものもつ好奇心に突き動かされてゆくさまが鮮やかである。その場面を次に引いてみる。

「かわいいこえだなあ。とりかな？」

しげるは石からたって、くろい木のあいだから、おくをのぞいてみました。

「やっほー。」

しげるは、もう一ど、よびました。

「やっほー ほー ほほほほ ほー。」

こんどは、ゆかいなふしをつけて、こたえてきました。

しげるは、からだを小さくして、くろい山の木と木のあいだからあたまをつっこんでみました。

「やあ、まるで、とんねるだ。そうだ、ぼくはとつきゅうつばめ！」

ほほほほのとりをみてこよう。」

しげるは、きしゃになったつもりでながいとんねるをくぐっていきました。

このしげるの積極性への転換は躍動感に充ちている。むしろ、この行動は「くろい山」へはいってはいけないという保育園の先生の戒め（子どもたちと交わした約束でもある）を破ったものではあるのだが、同時にまた幼い子どものもつ好奇心の発露と先述の若林千鶴のいう「枠からはみでたい子どもの気持ち」というものをつよく実感させる。そしてそれは、「ぼくはとつきゅうつばめ！」という比喻

にみごとにまで集約されている。

ここからは、しげるの勢いに充ちた前進する姿が生き生きと描かれている。しげるは「きしゃになったつもり」で、「とんねる」のような木々の繁みの中をくぐってゆく。木の枝がしげるの顔やシャツやおしりにあたっても、「くびをちぢめたり、せなかをまるくしたり、こしをまげたり、そうかとおもうと、せいのびをしてできるだけほそなったりして」進んでゆくのである。そしてついに、「ものすごいおぼけのような木」のところに到達する。それは、「ふといえだや、ほそいえだが、なん本もへびのようにはいまわって」いるおそろしげな木なのだが、前進の勢いの中にあるしげるは、「こんなの、くぐっちゃえ！」と言って、木の中へと突っ込んでゆくのである。

ところが、ここでしげるは困難に直面する。前進の勢いのままに突っ込んだ結果、木の間にはさまって身動きができなくなってしまったのである。この場面は詳細に描かれている。手や足、頭、むね、おなかが木の枝の間にはさまる様子を、しげるの動作に即しながら描いており、ちょうど子どもたちがジャングルジムをくぐりぬけるさまを連想させる。

しげるは、えだとえだのあいだに、あたまをつっこみました。つぎに、りょう手をいれ、それから、むねをいれました。

こうして、あたまと手とむねがくぐり、あとは、おなかと足です。

「よいしょっ。」

しげるは、ありったけのちからをだして、ぬけようとしました。ところが、ぬけません。

おなかが、えだのあいだにはさまって、あとにもさきにもうごきません。

「あ、ぬけない！」

くろい山には、だれもいません。

このしげるの直面した困難は、無援の状況であることが語られる。「くろい山」には誰もおらず、保育園の子どもたちは隣の「ももいろの山」へと行ってしまっているのである。なお、ここではまだ語られていないが、このように木の枝の間におなかがはさまって動けなくなった原因は、実はしげるが今まで「赤い山」「きいろい山」「だいいい山の山」で他の子どもたちの倍の数木の実を食べ、おなかがふくらんでしまったことにあるのである。想像力を働かせてそのことに気づく子どもの読者もいることであろう。そのような因果関係も背後に隠す形でプロットが進行している点に着目しておきたい。

ここまでプロットをたどってきて、あらためて確認しておきたいのは、本作品の子ども描かれ方である。主人公のしげるをはじめ保育園の子どもたちの造型が、きわめて鮮明な描線をもってなされている点である。中川正文が『『いやいやえん』—中川李枝子の出発—』（『現代日本児童文学作品論』昭和48年8月、盛光社）<sup>2)</sup>において『『いやいやえん』は、幼児の特性を熟知している保母・作家である中川が、これまでのように概念的に幼児を観察するのでは

なく、彼らを臨床的に捉えているという点、どの作家よりも科学的であるし、正確である。」と記しているように、子どもの知性・感情・意志の働きを子どもの発達の視点から正確に捉えているのである。

さて、ここで物語の視点は大きく転換する。今まで保育園の子どもたちやしげるを中心に、その視点から語られてきた物語の視点が、「くろい山」に住んでいる「おに」へと移るのである。プロットの展開から考慮すれば、しげる自身「ものすごいおぼけのような木」の枝にはさまって身動きが不可能になり、しげる自身の能動的な対処がむずかしくなったことが背景として考えられよう。が、それとともに、この物語の読者の「くろい山」への興味、関心がにわかに高まっており、ここで一気に「くろい山」の住人の方に話頭を移すことに読者の関心に呼応するタイミングを見出したとも考えられる。巧みなプロットの転換だと見なせるであろう。

まず、「くろい山」の「おに」の姿が紹介される。やや説明的な部分ではあるが、幼い子どもたちの日常感に沿いながら語られるので、子どもの読者にも自然と受容されると思われる。

このおには、ほしぐみぐらいのおとこの子で、ちぢれっけのあたまのまん中に、みどりのつのがあって、目と口の大きいかわいいおにです。

おには、ねずみいろともみいろのしまのけいとのおんつをはいて、きいろいシャツをきています。このシャツには、まえにも、うしろにも、せなかにも、そでにも、ぼけつがついています。どのぼけつとも、りんごとばななとみかんともで、いっぱいにくらんでいます。

この「おに」の描写で注目されるのは、鮮明な色彩感といっぱいの食べ物、そして、黄色いシャツのいたるところに作られたたくさんのポケットである。「まえにも、うしろにも、せなかにも、そでにも」いたるところにポケットが作られている。このポケットは幼児にとっては格別に関心を寄せるものであろう。幼い子どもにとってハンカチなどの日用品を入れるだけではなく、遊びの道具や嗜好品(菓子類)、それに遊びの場で手に入れた木の実や貝殻などの宝物を納めるものとして機能するのがポケットである。そのポケットに、「おに」はりんごやバナナなど子どもたちの好物をいっぱいに詰め込んでいるのであり、子どもたちの関心をつよく呼び起こす効果をあげている。何気ない描写でありながら、幼児の心理を考慮しつつ周到に描かれていることが理解される。

そしてこの「おに」が、助けを呼ぶしげるの声を聞きつけ、「さるのようにえだからえだへとびうつって」しげるのところまでやって来るのである。

読者はここで、「おに」がしげるに何をするかに関心を寄せるであろう。今までの「くろい山」のぶきみなイメージからするとさらにしげるを窮地に陥らせる態度に出ることも自然なりゆきなのであるが、作者はここで絶妙な構

成上のバランスをとる。「おに」はしげるに対して、「おう、どうしたい?」「どら、どら?」というように、やや上から見下ろす口調で応対するのであるが、一方で窮地に陥ったしげるに対する理解には気遣いと工夫の論理性が認められる。すなわち、「おに」は「しげるのあたまの上のえだにすわって、ゆっくりとていねいにしげるをみまわし」観察した後、「つまさきでしげるのせなかをつついて」みて、いくらつついても動かないのを確認して次のように言うのである。

「ふーん。たすけてやりたいけれど、おまえ、おなかがふくらんでだめだ。むりしてひっぱると、おなかがやぶけちゃうからな。」

「たすけてよう。はやく、かえりたいんだよ!」

「だいじょうぶ。もうすこしまてば、おなかがすいてくる。それまで、おれがついていてやるから、あんしんしな。」

「おに」は、しげるを観察した結果、しげるがあまりにも食べ過ぎたためにおなかがふくらみ、木の枝の間から抜け出せなくなったと判断している。そして、時間の経過によって腹の膨らみが解消すれば抜け出せるのであり、その間自分が見守ると告げて、しげるに安心感を与えているのである。

このような「くろい山」の「おに」の言動は融和的であり、いまだ「おに」の恐さを強調してもよいようにも思われる。しかしながら作者はここで「おに」の恐さをのぞかせる台詞のやりとりを導入して、前述したようにプロットの絶妙なバランスを維持する。それは、「おに」が自分を語る言葉の中に、さりげなく挿入されている。その部分を引く。

「きみ、だれ?」

と、しげるが、おににききました。

「おれは、この山のおに。『くいしんぼう』ってなまえ。

赤い山も、きいろい山も、だいいい色の山も、もみいろの山も、みんな、ほんとは、くろい山のしんるいなんだぜ。だからここにすんでいれば、りんごや、ばななや、みかんや、ももが、いくらでもたべられるんだ。

ぼけつがからっぽになれば、すぐとってくるんだもの、おまえもおににしてやろうか? おれのつのをすこしけずって、水でぬらしておでこにつければ、おにになるよ。」

「いやだい。おにになんかなりたくないよ!」

「ふーん、おまえも、ずいぶんくいしんぼうみたいだねどなあ。」

「ちがうよ。ぼくは、くいしんぼうじゃないよ。」

「そうかなあ――」

おには、しげるのかおを、ふしぎそうにみました。ここで「おに」は、しげるが「ずいぶんくいしんぼうみたい」だと見抜いた上で、しげるを「おに」にしてやろうかと提案する。それを聞いて、しげるはぎょっとする。

「おれのつのをすこしけずって、水でぬらしておでこにつければ、おにになるよ。」と言った「おに」の言葉が感覚的になまなましく、しげるの心を脅かしたのであろう。このとき、読者の子どもたちも、おのずと自分の額に感覚をあつめ、しげるの額の皮膚感覚を共有すると思われる。

なお、この場面において、読者の子どもたちの関心を、しげるの心理だけでなく「おに」の方にも向け、「おに」の心にも感情移入をうながすような構造を有している点に注目したいと思う。それは、「おれのつのをすこしけずって、水でぬらしておでこにつければ、おにになるよ。」と言った「おに」の言葉に、「おに」の孤独感を読者の子どもたちが感じとる可能性があるということである。物語の中で、「くろい山」にはこの小さな「おに」が住んでいるとは語られているが、その家族や仲間については何も記されていない。が、すみかが不気味な「くろい山」ということもあり、背景の暗さに取り巻かれて、「おに」の孤独感が揺曳するような描写がなされている。黒を基調とする色彩と、その中でひとりきりの「おに」の姿が、幼い読者におのずと孤独感や寂しさを感じとらせるのではなかろうか。そのように見てくると、「おに」がしげるに語りかけた「おまえもおににしてやろうか？ おれのつのをすこしけずって、水でぬらしておでこにつければ、おにになるよ。」という言葉は、単にしげるをこわがらせるだけの言葉ではなく、しげると友だちになりたいという「おに」の心理をもあらわしていると捉えることができるであろう。長谷川摂子が「しあわせな絵本。－K子ちゃんへの手紙－」（『ぼくらのなまえはぐりとぐら 絵本「ぐりとぐら」のすべて』平成13年10月、福音館書店）<sup>31</sup>で述べていたように、「友達探し」は幼児にとっての重要な心理と行動のモチーフであり、そうした子どもの心に寄り添うような場面として捉えることができると考えられる。

しかし、この「友達探し」のモチーフは、物語の中では深刻なものにはならず、プロットは軽やかに転換する。すなわち、木の間にはさまったしげるの救助という具体的な行動描写へと進展してゆくのである。「どれ、すこしおながすいたところだ。しらべてみよう。」と「おに」は言って、しげるの体をつつき、少し動くのを確認すると、しげるの体を木の間から抜こうとするのである。

このしげるの体を「おに」が抜く場面は、しげると「おに」の間に心が交流する重要な場面であり、躍動的に描かれている。動作そのものがしげると「おに」の解放された快活な笑いを生み出している。その部分を引く。

おには下へとびおると、

「さあ、ひっばるぞ！ 一、二、三！」

と、しげるのおしりをひっぱりました。

「すっぽーん。」

ぬけたひょうしに、ふたりはいっしょにころがって、

「あっはは……」

と、大わらいしました。

このしげると「おに」が「大わらい」したところに、この物語の一つの高潮部が設定されていると言えるであろう。

「すっぽーん。」という子どもたちの心はずませるオノマトベに加え、「いっしょにころがって」、「あっはは……」と大笑いする共有された動作によって、それまでのしげるの不安や脅えなどの感情が解放され、一種のカタルシスが得られているのである。

このようなしげるの情意の高揚を経て、童話『山のぼり』は以下収束へと向かってゆく。しげると二人で大笑いした「おに」は、しげるに「ほら、あっちからひかりがはいってくるだろう。あのひかりのほうにいけば、ふもとにつけるよ。」と言って「くろい山」からの出口を教えてくれたのである。しげるは、「わかった。どうもありがとう。」と答え、「あのひかり」に向かって「くろい山」を降りていった。

さて、収束部のしげるの描かれ方は独特である。しげるが「さっきの石」のところに戻ると、そこに「ももいろの山」から保育園の子どもたちが帰ってきて、しげるに向かって「どうしてこなかったの？」と問いかけ、いろいろと話しかけてくる。

「あれ、しげるちゃんのずぼん、やぶけている。」

「まあ、しゃつがまっくろだわ。」

「あたまに、はっぱがついているわよ。」

「かおがまっくろだ。」

このように、たてつづけにしげるは話しかけられるのであるが、そこからはシャツや顔がまっ黒で、ズボンが破け、頭に木の葉がくっついているしげるの惨憺たる姿が浮かび上がってくる。しかし、そうした子どもたちの問いかけに対して、しげるは無言で突っ立っている。そして、「あら、しげるちゃんのせなかに、足あとがついてるわ？ どうしたの？」と「おに」が背中をつついてつけた足あと（足の五本の指の跡）を指摘されると、しげるは急にあわてて「なんでもないよ。」と言ってシャツをまくりあげてしまうのである。

この結末の場面では、しげるの無言が印象的である。「くろい山」で「おに」と出会った体験をなぜか自分だけの心の内に秘めておきたい心情がうかがわれる。そのため、「さあ、しゅっぱつ！」と言って皆が元気に保育園へ向かって歩き出した時も、しげるの様子は何か心が皆と別のところにあるように描かれている。末尾の一節を引こう。

しげるは、いちばんうしろにつきました。

やぶれたずぼんをはいて、おなかとせなかをだし、

おまけに、おへそまでだして、おかしなかつこうでかえりました。

しげるは外見からはあわれなかつこうをしているのであるが、この時のしげるの内面はどうであろうか。そこにはおそらく後悔や落胆の思いはないであろう。「おにの足のゆび」の跡が残ったシャツをまくりあげて隠し、「おなか」や「せなか」に「おへそ」まで出したあわれな外見とはおよそ対照的に、このときのしげるの内面の物語は興味深い。「くろい山」で「おに」と出会い、心を通わせて「いっしょにころがって」「あっはは……」と大笑いした体験は、し



げるにとって自分だけの特異なかけがえのない体験であり、いわば幼年期の子どもたちがそれぞれの心の奥に密かに形成する自分だけの聖なる物語と言えるのではないだろうか。それだけに「おに」との交流は、ふだん保育園生活の中でも一人ぼっちになりがちなしげるにとって、周りには話したくない大事な秘めた物語であったのではないだろうか。

### 3 童話『山のぼり』と子どもの読者

前章まで『山のぼり』のプロットに沿いながら、その幼年童話の特質について分析してきた。本章では読者論的視点に立ち、物語中の人物やエピソードなどが、読者の子どもたちにどのように受容されているのかを、ここであらためて視点を絞って考察してゆく。物語の場合、人物の心理と行動に沿って読み進めてゆくことが多く、子どもの読者が登場人物のありようをどのように受容してゆくのかを中心に考えてみたい。

童話『山のぼり』においては、その登場人物は主として四種類に分けられるであろう。すなわち、保育園の子どもたち、その中の一人である主人公のしげる、保育園の先生、そして「くろい山」の「おに」である。このうち、子どもの読者が主体的に寄り添おうとするのは、やはり保育園の子どもたちとしげるであろう。しかも、しげるは他の子どもたちとはやや異なった行動をすることが多い子どもであり、いわば両者はやや対照的とも言える子ども像を示している。そのため、以下本章ではこの保育園の子どもたちとしげるの行動について、子どもの読者がどのような受け取り方をするのかを対比的な視点で考えてゆくことにする。

さて、『山のぼり』の物語を読む子どもたちは、登場人物の保育園の子どもたちやしげるから、どのような刺激や共感を受けとるであろうか。

最初に保育園の子どもたちから受けとる思いに目を向けると、今まで考察してきたように、この作品では一人一人の行動というよりは主として組全体、園の子どもたち全体という単位で描かれることが多い。例をあげれば、冒頭付近で「ほしぐみ」の子どもたちが「きょうは、おもちゃであそばないで、山のぼりをしようよ。」と言い、それを聞いた「ばらぐみ」の子どもたちも「山のぼりがしたく」なり、みんなで保育園の先生のところへ行き許可を得る場面があげられる。そしてさらに、先生と子どもたちみんなとのやりとりも、子どもたちという集団との意思のやりとりだと言えよう。その意味で、叙上の場面、とくに先生とのやりとりの場面ではやや画一的な描写法がとられている。先生がそれぞれの山で食べていくだもの数や、「くろい山」へは「ぜったいにのぼってはいけませんよ。」という戒めを告げたのに対して、子どもたちは一斉に「はい。」「はい、わかりました。」と元気に手を上げるのである。

実際に山のぼりを始めてからの保育園の子どもたちの姿は、読者の子どもたちの心に無理なく届くように描かれている。出発にあたっては、「みんなは、ごぶじょうへいってから、ぼうしをかぶってそとへでました。／ふたりずつ

手をつないで、ならびました。」とあるように、整然と並んで出発する。さらに、五つの山を前にして、「いちばんまへの、赤い山」から登るか、「いちばんあとの、もみいろの山」から登るかで、ばらぐみとほしぐみで意見が分かれたとき、子どもたち同士でそれぞれ理由を考慮しながら方針を出すところがある。「赤い山」から登ろうというばらぐみに対して、ほしぐみが「もみいろの山からのぼって、赤い山をいちばんあとにすれば、かえるとき、ちかみちになるよ。」と言うと、二つの組は「そうだ、そうだ。そうしよう。」と意見が一致する。そして、その直後、ばらぐみの小さい子たちが「ちょっと、とまってよう。おなかですいて、あるけないよう。」とほしぐみに向かって訴えると、その空腹の理由をもって、ほしぐみの子どもたちも「しょうがないな。じゃあ、赤い山からのぼってやろう。」と同意するのである。ここには、近道になるという物理的事由と、空腹で歩けないというやや情緒的とも見える事由とが対立するが、結局は後者の事由を汲み取って「赤い山」から登ることに方針を決定する子どもたちの判断力が描かれている。そこには、幼いながら理性と感情にはたらきかけ意志をもって一つの方針を出すという、ある意味で高度な集団としての合意形成のプロセスが認められる。意見の対立はあるが、言い争いにならないところにやや理想的な姿が見られはするが、これはこののち描かれるしげるの別行動をとりがちなり方と対照させるねらいがあるであろう。

こうしたある意味で融和的な園の子どもたちの姿は、この物語の終わりまでほとんど一貫しており、別行動をとるしげると対立することもなく、わがままなしげるの行動を受け入れている。このような園の子どもたちの姿を、ほぼ同年齢の読者の子どもたちは、自分たちの体験に照らし合わせてごく自然に受容すると考えられる。しかし、それだけではおそらく物語を受け入れる読者の心は充たされたとは言えず、好奇心の横溢する子どもの心を託す器としてしげるの行動があると言えるのではなからうか。とくに冒頭に示された「くろい山」への興味、関心が読者の子どもたちにわくわくとした期待感を抱かせるであろう。その案内者としてふさわしいのは、融和的な園の子どもたちではなく、むしろ無鉄砲なところのあるしげるなのである。

次にしげるの心情と行動についてであるが、まず言えることは園の子どもたちの一般的な行動に対してしばしば対立する描かれ方が見られるという点である。保育園で先生に山登りに際しての約束をする際にも、皆が手をあげて賛意を示しているのに対し、しげるだけはわざと両手を上げる。また「赤い山」に着くと、急に子どもたちの列から飛び出して「あ、ぼくきめたつと……あの大きいりんごは、ぼくのだよー」と言い、皆を追い越して一番先に大きいりんごを採ってしまう。さらに、自分だけ先に食べてしまうと、皆を「おそいなあ、はやくたべちゃえよ。」とせかし、さらに待っている間にこっそりと二つ目の実を食べてしまうのである。

こうしたしげるの行動に対しては、読者の子どもたちに

は必ずしも一様ではない反応があらわれると思われる。しげるの多分に自分勝手な行動を批判する子どももいるであろうし、またそうしたしげるの行動を一応は許容する者、さらに共感を覚える者も出てくるであろう。基本的にはしげるは保育園の生活のルールを時折り破っているのであり、その点をどう捉えるかによって反応は分かれてくるであろう。

が、同時に、しげるがこれから「くろい山」に登るのではないかという予想が読者の子どもたちの内にも生じてくるのも確かで、しげるの行動に注目が集まるような構成上の工夫もなされている。

それともう一つ、ここでおさえておかねばならぬことに、前章でも論及したようにしげるの帯びている孤独がある。物語全体をふり返ってみれば、しげるは多分に自分勝手にルール破りをする子どもではあるものの、それは多くが単独行動であり、他の子どもが同調してくることはない。そのようなしげるの姿は、周りの子どもたちから見れば「ひとりぼっち」という印象を与えるであろう。この「ひとりぼっち」という状態は、幼い子どもたちにとっては、とくにつよく印象されるものであり、幼年向けの童話・絵本の中にも数多く取り入れられている。アーノルド・ローベル『がまくんとかえるくん』、林明子絵・筒井頼子文『はじめてのおつかい』、あるいは新美南吉『ごんぎつね』などもそうした「ひとりぼっち」をモチーフとしており、いずれも読者の子どもの心にひびき合うものを有している。

以上見てきたように、『山のぼり』の主人公しげるは、読者の子どもたちにとってその共感の度合いには幅があろうが、その行動は、『山のぼり』という物語のプロットの展開の中でやはり推進力を有しており、読者がしげるの行動から視線を離すことはむずかしいと考えられる。

そうした中で、この物語の中核をなす、「くろい山」へと分け入ってゆくしげるが描かれてゆく。その「くろい山」探検の前半では、山中から聞こえる「やっほー ほー ほほほほー」という声に導かれて「くろい山」へ分け入ってゆくしげるの姿が躍動的に描かれている。木々の間を次々にぐりぬけながら、「やあ、まるで、とんねるだ。そうだ、ぼくはとききゅうつぼめ！」と言って突き進むしげるの姿には、それまでの自分勝手にやや反抗的な子どもとはちがう、読者を魅了する躍動感が見られるであろう。ここでしげるは、まぎれもなく童話『山のぼり』の主人公となりえている。それだけに、その後に訪れたしげるの窮地（木の枝の間に体がはさまって身動きができなくなったこと）には、読者は素直な共感を寄せることになるのである。

次に「くろい山」冒険の後半場面であるが、ここでは前章の考察でも述べたように、しげると「おに」との交流が描かれている。その「おに」は、最後は木の枝の間にはさまったしげるを救ってくれる親愛の情を示すのだが、一方で「おまえもおににしてやろうか？ おれのつのをすこしけずって、水でぬらしておでこにつければ、おにになるよ。」と脅かすような怖さも感じさせる存在であり、またその言

葉の裏側には仲間を望む「おに」の一抹の寂しさものぞいているように思われる。このような「おに」との交流のさまは、身動きのできない窮地に置かれたしげるにとってはしばらくは緊張感に充ちたものである。

一方、読者の子どもたちにとっては、「おに」についてあらかじめ紹介がなされており、「このおには、ほしぐみぐらいのおとこの子で、ちぢれっけのあたまのまん中に、みどりのつのがあって、目と口の大きいかわいいおにです。」というように柔らかな印象を与えられている。そのような予備知識をもった読者の子どもたちは、窮地にあるしげるの身が悪い展開になることはないと思いつつ読み進めてゆくことになる。そのとき、読者の子どもたちには、しげるに安心感を与えたい気持ちも生じてくるものと思われ、しげるの視点を超える物語の展望を得ているのである。そこから窮地にあるしげるをいとおしむ感情も流露していると考えられる。いずれにしても、物語においてしげるの中を流れる時間と、その時間の外側を知り得ている読者の子どもたちの中を流れる時間とは次元を異にしつつも不即不離の関係にあるのである。そうした異なる時間を経た末に、「おに」がしげるのおしりをひっぱり、「すっぽーん。」と抜けた拍子に、「ふたりはいっしょにころがって、／「あっはは……」／と、大わらい」したとき、しげると「おに」と読者の子どもたちの中を流れる時間は一つとなり、物語の頂点をなすカタルシスを形成してゆくことになるのである。

このように見てくると、読者の子どもたちにとって、しげるの評価の高まりは、ぶきみな「くろい山」の奥へと敢然と分け入ってゆくしげるの勇気と行動力に依拠していると捉えられよう。しかしながらまた、物語の結末においては、そうしたしげるの勇気と試練に充ちた冒険を追体験してきた読者の子どもたちと、「くろい山」での冒険を知らない保育園の子どもたちとの間では、主人公しげるに向けられた眼には大きなちがいが生じている。すなわち、物語の終結部で「やぶれたずぼんをはいて、おなかとせなかをだし、おまけに、おへそまでだして、おかしなかつこう」をしたしげるの姿は、読者の子どもたちにとってはすばらしい冒険の結果として肯定的に見られ、一方保育園の子どもたちにとっては相変わらず自分勝手な行動をしている仲間の一人としてやや醒めた眼で見られているのである。そのことはまた、物語の終結部において、「くろい山」の冒険の秘密を、しげると読者の子どもたちだけが共有していることを示している。ここに読者の子どもたちの喜びがあらう。作中のだれも知らなくても、読者の自分だけは知っているのだという、読者の子どもたちのひそやかな共感の喜びがそこには生まれているのである。

以上見てきたように、『山のぼり』の物語世界とそれを受容してゆく読者の子どもたちとの間には、独特の関係性が見られる。とくに物語世界の中の子どもたち（主人公しげると保育園の子どもたち、及び「くろい山」の小さな「おに」と、その子どもたちの心理と行動に沿って物語世界を追体験する読者の子どもたちの間には、しげると読者、



保育園の子どもたちと読者、「おに」と読者の関係それぞれに独特のものが認められる。読者の子どもたちは、ある時は保育園の子どもたちとともに園の先生の話聞き、山に登り、自分勝手な行動をするしげるの姿を眺めている。またある時はしげるのわがままなことをしたくなる気持ちを批判したり共感したりする。とくにしげるが「ぼくはとっきゅうつばめ!」と思って「くろい山」に分け入るときには読者の子どもたちの期待感には高揚するものがあるであろう。さらに物語の結末であわれなかついで保育園の子どもたちの最後尾を歩くしげるへの思いには、読者としげるだけを繋ぐ共感の絆を見出せるであろう。加えて小さな「おに」の存在も、その「くろい山」な性格やポケットをくだものでいっぱいになっている姿、さらに最後は窮地にあるしげるを救ってくれる者として読者の子どもたちの共感を得ていると考えられる。童話『山のぼり』は、叙上のように登場人物の子どもたちと読者の子どもたちとの相関性を視点にして分析するとき、明快なプロットの裏側に多様な構成上の工夫がなされていると考えられるのである。

## 結

中川李枝子の幼年童話『山のぼり』について、その作品世界の構造を分析し、それをふまえて読者の子どもたちがどのような受容を示すかを考察した。本稿においては、『山のぼり』の幼年童話の特質として、瀬田貞二が『幼い子の文学』（昭和55年1月、中央公論社、中公新書）で提唱した「行って帰る」構想をはじめ、食べ物のモチーフ、同質のエピソードの反復、個性的なオノマトペ、数あそび的要素、歌謡的要素などを指摘した。そうした幼年童話の基本的要素をふまえて、『山のぼり』においてしげるという少々反抗的な心理と行動を示す子どもと、保育園生活を送る他の子どもたちとの対比が鮮やかになされている構想上の特質を分析した。保育園の子どもたちの姿が比較的素直な形で描かれているのは、主人公しげるの人物像を鮮明化するためとも思われ、そのことはとくに「くろい山」でのしげるのエピソードを印象深く重要なものにしている。

こうした作品構造においてとくに注目すべきは、読者の子どもたちが物語中の子どもたちをどのように受けとめているかということである。その際、読者の子どもたちは、保育園の園児たちの心理と行動に寄り添い、また若干わがままなしげるの心理と行動にも寄り添うのであるが、前章で論じたように、しげるに寄り添う読者の子どもたちの受容には独特のものがあるであろう。山に登る保育園の子どもたちが描かれる場面では、列を飛び出して先に木の実を採りに行こうとするなどわがままな行動をすることの多いしげるに対して、読者の子どもたちの反応は共感する者と、やや批判的に見る者に分かれるであろうが、しげるが皆と別れてひとり「くろい山」へと分け入ってゆく場面に至ると、読者の子どもたちの心をつよく惹きつける主人公になりえていると言える。そのしげるの像の転換は鮮やかである。そして、しげるが「おに」と出会い、「おに」に窮

地を救われ、二人で地面にころがって大笑いする場面では、しげると「おに」、そして読者の子どもたちが一体化したカタルシスが見られると言えるであろう。さらにそのカタルシスは、しげると「おに」と読者の子どもたちだけが共有しているものであり、保育園の子どもたちの知らない秘密となっている。物語の終結部では、汚れたあわれな姿のしげるが描かれているが、それが「くろい山」での結果だということは読者の子どもたちとしげるだけの秘密なのであり、そこに読者の心を惹きつけるゆえんがある。

以上見てきたように、中川李枝子の幼年童話『山のぼり』は、幼年童話の基本要素を確実におさえながら、とくに「くろい山」探検の閉じられた時空間の内部において主人公しげるの躍動的な姿と「おに」との交流が描かれる独特の構成をなしている。すなわち、「くろい山」を外側から眺める者と、「くろい山」を内側から知りえた者との違いであり、その内側に読者の子どもたちが引き込まれてゆくところに、この物語の魅力の源泉があろう。

今回は『山のぼり』という一作品をめぐる作品構造の分析と読者論的視点からの考察を行った。今後さらに童話集『いよいよえん』所収の作品との関連に目を向け、多角的な視点からこの物語の特質を探究してゆくことを課題とし、本稿を閉じることとする。

## 注

- 1) 若林千鶴「しげる」（定松正編『世界・日本児童文学登場人物辞典』平成10年4月、玉川大学出版部）101頁。
- 2) 中川正文『『いよいよえん』—中川李枝子の出発—』（『現代日本児童文学作品論』昭和48年8月、盛光社）。引用は中川正文著作編集委員会編『中川正文著作撰—児童文学・文化を問い続けて—』（平成26年2月、ミネルヴァ書房）による。同書436頁。
- 3) 長谷川摂子「しあわせな絵本。—K子ちゃんへの手紙—」（『ぼくらのなまえはぐりとぐら 絵本「ぐりとぐら」のすべて』平成13年10月、福音館書店）94—99頁。